

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連 219 載

緩やかな生き方のすすめ

海外を訪れたとき、その国の美術館で突然豊かな日本文化に遭遇し、意外に思うことがままある。浮世絵や鎧兜、仏像などの陳列を目にすると、それらが様々な理由を背景に海を渡って世界中に運ばれた歴史がうかがえる。特に仏像は、明治元年の廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）による破壊を免れ、外国人の手に渡り、本国へ送られたものが多い。明治政府は、大政奉還を経て神道と仏教の分離を目的とした神仏分離令を公布。これは、神社内における神仏習合を一掃し、天皇の神権的権威のもとに神道の国教化を図ろうとしたものだったという。明治政府はほぼイコール薩摩藩のこと。

そもそもは、若くして亡くなった島津斉彬が外敵から国を守るために、大砲や軍艦などを必要とした、つまり銅を欲して寺に梵鐘を供出させたのが始まりだという。それに加え、当時は僧侶よりも神官の方が身分が低く、不満がくすぶっていたところの神仏分離令。ここぞとばかりに神社は寺院の破壊を願いだした。また、寺の檀家制度に縛られていた一部農民たちもこれに賛同。今でも日本のあちこちに首や手がもがれた悲惨な仏像が打ち捨てられているのを目にすることがあるが、これも廃仏の残骸だといわれる。

神仏習合といっても難しいことではない。かつては

神社の中に寺院があるのは珍しくなく、現代でも我々は神社にお参りをし、寺で葬式を執り行い、教会で結婚式を挙げる。日本人は昔から、神も仏も西洋宗教もいいとこ取りをして緩やかに暮らしてきたのだ。それにしても、神官が僧



侶より身分や待遇が低いという認識があったとは驚きだ。が、それも無理からぬところ。かつて、神々は仏に強く救いを求めていたという歴史があるからだ。

三重県桑名市と岐阜県の県境に標高400メートルほどの多度山という山があ

る。古代から山全体を神体とし、山中には信仰の対象である岩が鎮座している。763年、奈良時代の終わりに多度山の神が人により移り、次のようなご神託を述べたという。

「私は神として、長い間この地方を治めてきたが、いつの間にか道から外れ、神道の報いを受ける身になってしまった。今願うのは、神の身から永久に離れるために、仏教に帰りたい（仏にならなりたい）」ということ。もはや、それしか道はないのだ」と。

このように、多度山の神のみならず、日本のあちこちで神たちが神であり続ける事の重圧から逃れたい、仏に救ってほしい、と願い出る現象が見られたという。仏教を普及させるための作りばなしと言ってしまうそれまでだが、これら神の声を受け止めて、各地で僧侶たち

が仏教への誘いの道を開き、あちこちに神宮寺が建立されたといわれる。

日本は、万物に神が宿る信仰を持ちながら、外来宗教である仏教をスムーズに受け入れた。明治政府の廃仏毀釈の際には、これといった大きな抵抗もなく流血沙汰も起きていない。しかも明治40年には今度は神社合祀令が出され、神社の統廃合が始まる。これに対してもまた、国民ともども「あ、そうなんだ」的に粛々と従っている。

国全体に「近代化」とはそんなものか、という思いがあったのだろうか。それとも、もともと国の命令に対しては素直な性質をもっているのだろうか。いずれにしても、深刻さとは程遠く、激動の時代を流されるように生きていく日本人像が浮かび上がってくる。

この、おおらかさとも映るいい加減さこそ、むしろ現代の私たちには必要なかもしれない。

イラスト・伊藤香澄